

哲学者のバイオエシックスへの参入

—「倫理の布教使」を実践する哲学者ピーター・シンガーについての考察—

山本 栄美子

はじめに

「バイオエシックス＝生命倫理」はその誕生の地である米国において、1990年代までにはすでに一大「成長産業」とも言われるほど大きく発展していた⁽¹⁾。その成長に哲学者が少なからず寄与してきたことは現在では自明のこととなっている。本論文でとりあげるピーター・シンガーは、現存の哲学者の中でその名が一番よく知られ、一番広い読者層を持ち、実践的に多くの人の人生を変えたという点で、現代の最も影響力のある哲学者であるとも評されている⁽²⁾。シンガーは、自身の専門分野たる哲学・倫理学の領域にとどまることなく、政治・経済・医療・環境・国際援助・社会生物学といった幅広い領域に関心を寄せて、個々の領域別に独自の哲学的解答を提示したり、あるいは、あらゆる領域を包含するようなグローバルな倫理の構築に積極的に取り組んできた。これまでに、大学の教授職と並行して、国際生命倫理学会の初代会長、大型類人猿プロジェクトの会長、動物保護団体「アニマルライト・インターナショナル」会長も歴任している。しかし、そうした大々的な活動以前に実は、1970年代前半というバイオエシックスの草創期にあつて、専門の殻の中に閉じこもる哲学者に向けて、医療倫理を中心としたバイオエシックスへの積極的な参入を呼びかけていた、いわば、ここ30年以上に及ぶバイオエシックス発展の火付け役の一人でもあつた。けれども、日本においては、そのことはほとんど取り上げられていない。功利主義を踏襲する独自の哲学的思考を普遍的な倫理原則と見なせるものとして掲げ、その実践によって「世界の苦しみの軽減」を命題に据えた実現に取り組む、現代における「倫理の布教使」—哲学者ピーター・シンガーについて、宗教学の視点から考察を加えることが本論文の主な目的である。

1. シンガーの実践理論の基礎構築

1-1 シンガーと功利主義

ピーター・シンガーは、1946年、オーストラリアのメルボルンにて出生、メルボルン大学の哲学科にて文学学士・修士を取得している。修士論文は「私はなぜ道徳的であるべきか」という題名で、私益と倫理の関連について過去2500年にわたって哲学者たちが出してきた答えを吟味したもので、シンガーにとっては、過去の哲学者たちの答えは「どれ一つとして本当に満足のいくものではない」という結論を出すしかなかったという⁽³⁾。博士課程は、自らもヴェトナム反戦運

動の実践家であったことから、実践運動にたいする倫理学の裏づけを追求することを目的として、オックスフォード大学の倫理学・社会哲学専攻に在籍、R・M・ヘアに師事し、哲学博士号を取得している。

シンガーの理論の支柱となる考え方は、ヘアの「選好功利主義」の思考を踏襲している。選好功利主義とは、〈最大幸福〉を「当事者すべての選好を最大に充足する」と読みかえて、ベンサム「だれをも一人として数え、一人以上に数えてはならない」という主張を受け継ぐ形をとった功利主義で、道徳的判断を下す際には、人々の選好を基礎として、私たちの判断の影響を受ける人々の利益について公平でなければいけないと考える。ヘアによる功利主義の基礎づけは、道徳的思考を行なう人が他人の立場について十分な知識を持てば、その他人の選好に対応する自分の選好を獲得する（他人の選好を自分の中で再現する）ことができ、それをすべての当事者が実行し、人々がどのような選好をもつかという事実を把握し、当事者すべての選好の充足を最大化させるような考察を加えることによる合理的選択の結果として、すべての当事者が一致した結論に達するという構想である⁽⁴⁾。

「私の倫理的な立場は功利主義であり、苦しみをなくそうという命題はこの立場に由来する」⁽⁵⁾といったシンガーの発言にもみられるように、シンガーがヘアの選好功利主義の立場から導き出して自身の実践理論の基礎に据えたのは、関係者すべての利益を比較考量した上で、地球上の存在者（人間だけではなく動物も含めて）の「苦しみ」の総量を軽減しようという命題である。ただし、苦しみあるいは幸福の「経験」よりは、むしろ「選好」の満足の方を重視する立場をとる。例を挙げると、本人が置かれている状況を苦痛と判断し、死という経験を望む本人の「選好」が存在するのであれば、「死」がもたらす苦しみよりも優先して本人の選好を重視するといった立場である⁽⁶⁾。「行為が快樂あるいは幸福を最大化させ、苦痛あるいは不幸を最小化する傾向を持つか否かによって、その行為を判定する」といった古典的な功利主義の理論との関連を踏まえると、「苦しみ」の最小化をもって関係者すべての選好の満足の最大化を図るといった意味において、最大量功利主義の一形態（帰結した総量の結果でもって判断するので、最大量功利主義の立場は帰結主義とも言われる）と捉えることができる。

シンガーは、「我々には自分たちの行為のいっさいの結果に責任がある」⁽⁷⁾として、行為とはできごと（世界の歴史）にある違いを生じさせることであり、たとえ何しなくても、不作為の行為をしたことになり、積極的に為すことに対してと同様に、為さないことに対しても責任があるとみなす。さらに、「ある状況において人が倫理的に選択しなければならない行為とは、その状況において選択可能な行為のなかで関係者全体にとって最善の結果をもたらすような行為である」⁽⁸⁾とも述べている。倫理的に判断するとき、人は「私の利益は他ならぬ私の利益だから」という理由で、他者の利益を無視したり過少に評価してはならない。あるいは、自分の利益を他者の利益以上の重みをもつものと考えてはならない。倫理の基礎的なレベルでは、誰の利益をも平等に配慮しなければならず、したがって、倫理的に判断するとき、自分の行為によって影響を受けるすべての人々の立場に身をおいて、彼らの利益をあたかも自分自身の利益であるかのように考えなければならない。そして、それらの利益を比較考量し、全体として関係者の利益を最も促進しそうな行為を選択しなければならない、とする。このような行為理解が、シンガーの強調する「実践」の立場に大きく影響をもたらしていることに留意する必要がある。

1-2 功利主義の行為理解

シンガーの行為理論は、やはり功利主義の考え方に端を発する。そもそも、功利主義の学説⁹⁾は、個人の道徳的行為だけでなく、政策や立法の正否の基準も一元的に提供することを目指す(功利原理)を理論の中核に据える。この原理は、①社会の最大幸福を目的として、究極的善を規定する、②個人的行為、政策、あるいは法体系がもたらす結果がこの目的増進に対してどの程度貢献するかをもって正否の基準とし、動機の是非を問題にする必要はない「帰結主義」の原理を採用する、③最大幸福を個人個人の私的善の和として規定する、といった特徴を持つ。近代功利主義の始祖ベンサムは、①の価値論として「快と、苦の欠如のみがそれ自体で善である」という倫理的快樂説に基づき、③の個人主義の立場を誰よりも鮮明に打ち出して、最大幸福を定義した。時代背景として、近代市民社会の理性的存在者である近代的自我の自由な自己決定が重視されるようになるとともに、「行為」の問題はもっぱら人間の良心、道徳、人倫性などにかかわるものとして世俗的に捉えられるようになった。可能な行為が社会にもたらしうる快と苦の総量を計算し、なすべき行為、採用すべき政策、あるいは刑法も含めたあるべき法体系を決めようという方針は、M・フーコーが『監獄の誕生』¹⁰⁾で指摘したような、新たな支配技術が遍在化しつつある時代の移行期にあって、支配統治理論の基礎に据えるべきものとして当時はきわめて明快なものに映ったといえよう。続くJ・S・ミルによって、「なぜ快が善で苦が悪なのか」という倫理的快樂説に対する鋭い問題提起がなされ、「快が苦より望ましい」という判断は、結局人が快を苦よりも好むという選好の事実に訴えて確立するほかはないと結論づけられた。

こうしてベンサムやJ・S・ミルによって古典的定式化が図られた古典的な功利主義は、①バランスの適正さや差別の根拠の有無を判断する基準をどこにおくか、②バランスの確立や差別の除去をどのようにして実現するか、といった〈何が正義か〉を規定する正義原理の探求に対し、①については人々が現に味わっている喜び(すなわち「功利・効用」utility)という基準を用い、②については「最大多数の最大幸福」を原理に据えて、一九世紀イギリスにおける自由主義的改革の一翼を担った¹¹⁾。伝統的な支配的宗教から完全に独立した体制を築くことを要請された近代の政治や経済・社会政策を具体化する上で、功利主義は、思想的基盤を積極的に提供し、社会思想上に大きな影響をもたらしてきた。

シンガーの場合は、①には「効用」ではなく「選好preference」という基準を用い、②については「世界における総体的な苦しみの量を減少させること」を据えているのが、古典的功利主義と異なる点である。近年ますます科学技術の発達と医療の制度化に伴い、是非の決着が困難なさまざまな実践的課題に対して、哲学的な見解をベースに解決策を積極的に提示していくシンガーの姿勢は、以下で論じるように、「倫理」の名を借りた、現代における「功利主義」の布教使なのかもしれない。

1-3 実践問題と道徳の専門家

まず、シンガーの草創期の三つの論文を紹介することで、シンガーが実践問題への哲学的介入の必要性を主張し、それを他の哲学者にも呼びかけてきたということを示すことにする。

シンガーは、1971~73年までオックスフォード大学の講師を勤めていたが1972年には、弱冠25歳で、'Famine, Affluence and Morality'「飢餓、富裕、道徳」と題した専門論文を書いている。

この論文は、“Philosophy and Public Affairs”『哲学と社会問題』誌第1巻に掲載され、道徳哲学における有名な論文の1つとも言われている⁽¹²⁾。先達の哲学者たちの引用や伝統的な形而上学のテキストからの引用が多いといった従来の哲学論文のスタイルとは異なり、「物事をありのままに正しく理解することから始めなければ哲学は存在しない」とした、シンガーの現実的な事実を重視する姿勢と問題意識の明確な記述が思想界に衝撃を与えたと評価されている⁽¹³⁾。シンガーはこの論文において、「世界の遠く離れた地域に暮らす人々が食料やその他の生活必需品がないばかりに死んでいくときに、裕福な市民が富と安楽を享受することがなぜ間違っているのか」を道徳的に解明し、読者に向かって生活態度を根本的に変えるよう呼びかけている。また同時に哲学者たちに対し別の批判の矢を向けて、哲学者たるもの、他の人々と同様に物資を援助すべきなのはもちろんのこと、世界の飢餓のような重大な実践的問題についての自分の立場を明らかにすべきで、「哲学が教師と学生の双方に関わる問題を扱うべきだとすれば、飢餓の問題こそが哲学者の議論すべきことである」と強調している⁽¹⁴⁾。

同じく1972年、応用倫理というフィールドが成立していない当時、シンガー自らが「倫理」について述べた最初の作品と称するのが‘Moral Experts’「道徳の専門家」と題する短い評論である⁽¹⁵⁾。倫理の重要な課題について、「道徳哲学者が道徳問題の専門家である必要は全くない」・「道徳哲学者の役割は説教者ではない」と決めこむ、当時の哲学界の一般的な認識に対して挑戦する意図をもって書かれている論文でもある。当時の倫理学においては、道徳言語の分析に焦点が絞られ、またそうした学問的姿勢が道徳的に中立であるとみなされていた。そのことに対してシンガーは、「それでは物事の正邪や善悪といったことに関する判断が何も導かれない」と批判し、熟慮を重ねて比較考量することを仕事としている道徳の専門家こそ、一般人にとって現実的に解決困難な問題についての考察に取り組み、明快な解答を与える健全な議論の手助けを与えるような実践を行なうべきであると主張した。

1-4 「哲学者よ、ふたたび出番である」

シンガーの名が、英米圏にて有名になったのは、‘Philosophers are back on the job’「哲学者よ、ふたたび出番である」⁽¹⁶⁾と題した評論による。1973年秋に渡米したシンガーは、ニューヨーク大学で講師として教鞭をとる傍ら執筆に従事し、1974年、この論文を“New York Times Sunday Magazine”誌に発表した。読者層が広い雑誌に掲載されたことから、哲学界だけに限らず、実践の倫理運動への注目を、広く非専門家たちの間に拡大させて反響を呼んだと言われている⁽¹⁷⁾。

この論文では、当時の哲学界で主流を占めていた道徳哲学の日常言語学派や、ロールズの正義論の展開の仕方が、一般の道徳的直観を擁護してしまい、人々が通常抱いている先入観を批判的に検討し、問い直すことを回避してしまうとして、批判の対象としている。シンガーは、「正義を主題とする道徳哲学や政治哲学は、真剣に取り組めば現実的な結果をもたらす領域である」と主張し、「我々は何をなすべきかという問いに対して、社会の一般の人々がなすべきだと考えていることを記述するだけでは、結論を正しく導き出したことにはならない。正しく根拠づけられた道徳理論から出てくる結論であれば、たとえ重大な問題についてのそれまでの道徳観を変えざるをえなくなろうとも、我々はそれを受け入れるという姿勢を守るべきである。この点を見失うと、道徳哲学はもはや世間的な道徳規範を根本から批判する力を失い、現状維持に奉仕するだけ

のものとなる」と現状を厳しく批判している。

また、社会的議論を呼ぶような道徳的問題が生じた際、宗教指導者に決まって意見が求められるという慣習について取り上げ、「定期的に教会に行く人などほんの一握りにすぎないため、結局それは我々の社会の道徳的態度について偏ったイメージを生み出すことになってしまう」と批判している。そして、「道徳に対する平衡感覚を取り戻すためには、宗教的道德家と同じくらい、宗教色のない道徳家にも意見を求めるべきではないか—その際、宗教色のない道徳家として、道徳哲学者以上にふさわしい者がいるだろうか」と強調している。さらに、道徳哲学者が司教の役割にとって代わるべきだと言っているのではないことを強調した上で、「哲学者の目的とは、推論と議論によってある道徳的立場が他の立場より好ましいことを示すことにほかならず、「道徳概念の本質について理解し、とりわけ、他の人よりも深く吟味し、先入観にとらわれないことによって、哲学者は道徳的議論の水準を現在の暗澹たる低次元から引き上げていくことができるかもしれない」と、いよいよ哲学者の出番の到来であることを呼びかけている。

そして、「明確化と厳密さを必要とする道徳的問題に哲学者が貢献できることを示す最もよい例は、医療倫理の分野の議論に見ることができる」と提言していることから、この時すでに、後にシンガーが「嬰兒殺しの提唱者」呼ばわりをされ、「シンガー事件」と呼ばれる主にドイツ語圏で発生した事件にまで発展するきっかけとなった著作“Practical Ethics”『実践の倫理』（1979年）の構想は始まっていたと考えられる。「新しい医療技術とそれに伴って揺らいでいる態度は、ますます多くの倫理的問題を生み出し、医療従事者は日々これに直面しなければならない。しかし、医師はこうした倫理的な決定を行うことに不安を感じている。」と述べて、医療専門家内では解決困難な倫理的課題について、道徳哲学者と協力し合うことでいかに誤りを避けることができるかを説明している。道徳哲学者の貴重な利点として、医師とは違って倫理問題についてよく考え議論するための時間がたっぷりとあり、道徳概念の性質や道徳的議論の論理についても勉強しており、議論を検討し、誤った思い込みを見つけることにかけては、人並み以上に能力があるように訓練を受けている、といった点を上げ、これまで敬遠してきた倫理の分野に哲学者たちが参加することは、「近年の哲学の新たな展開の中でも最も刺激的なことであり、かつ、最も実り多いものとなる可能性を秘めていると私は確信している」と述べて、哲学者によるバイオエシックスへの参入を提唱している⁽⁴⁸⁾。

専門の殻の中に閉じこもるといった従来の倫理学のスタイルをまず批判するところからはじめ、新たに哲学者によるバイオエシックスへの積極的介入の必要性を呼びかけたシンガーの提言は、1970年代前半という、バイオエシックスのいわば理論的構築の模索期にあたり、当時のアカデミズムに少なからぬ影響を与えたと考えられる。

1-5 「実践倫理学」誕生の時代背景

すでに述べたように、シンガーがヘアのもとに赴いたのは、反戦運動家として、自己の実践の理論化を試みるのがその動機であった。1975年、世界的な反響を呼んだ“Animal liberation”『動物の解放』を著したシンガーは、今や「動物解放の父」と呼ばれ、動物解放運動の流れを巻き起こした人物の一人とされている⁽⁴⁹⁾。動物解放運動は、環境保護運動と並んで、ヴェトナム反戦運動、人種差別撤廃運動、女性の解放、難民の救助運動等、市民運動が盛んな時代潮流の延長上に

位置しており、シンガーを代表とする哲学者・倫理学者たちの実践への取り組みは、このような世界的な運動の大きなうねりのなかから生まれたもので、さらに、この傾向から新しい実践倫理学という研究がうまれたといった指摘もなされている⁽²⁰⁾。有色人種、女性、戦争被害者、さらには動物、自然環境といった歴史的に長くマイノリティの立場におかれていた人や物たちが、不当な扱いを受けてきたことへの反発を示し、主体的な権利を主張しはじめていった時代にあって、専門特殊性からしても当時においては社会における有用性にはほど遠いと見なされていた、いわば学問的にマイノリティの立場にあった哲学者たちも、実践問題に哲学的思考を駆使して取り組むことに自分たちの活躍の場を見いだしていったという、時代の潮流との相関性を看取することができる。

シンガーの場合、『動物の解放』以降、現在では実践倫理学の古典としての地位を確保するにいたっている“Practical Ethics”『実践の倫理』をはじめ、オーストラリアの書籍売上の総合で8位を記録した“How Are We To Live? Ethics in an Age of Self-interest”『私たちはどう生きるべきか』など編著や共著も含め30冊以上の著作を世に出してきた。そこで論じられている問題の多くが、現代が抱える実践的な課題である。それらの著作は、1974年までの初期の論文で、シンガーがその必要性を強く訴えていた「哲学者による実践問題への参入」をみごとに実行した作品群とみなすことができるだろう。

2. 倫理原則とその適用

2-1 4つの前提と西洋の伝統的思考への批判

『動物の解放』以降の数々の著作で展開されている主張の理論的根拠となる、シンガーの倫理原則なるものは、次の4つの前提である。これらの前提の組み合わせによって、世界の貧困問題に対する提案、動物が不当な扱いを受けていることへの批判、中絶や障害胎児／新生児殺しの擁護、自発的安楽死の正当化、環境問題に対する提案を行っている。

- 1) 「苦痛やそれに類するものはそれとして無条件に悪であるということ。その反対に、快楽や幸福は善である」
- 2) 「人間だけが唯一痛みを感じたり苦しむことが可能な存在ではなく、動物も同様な感覚を有するということ」
- 3) 「生命を奪うことの深刻さについて考慮する際に、自分が属している人種や性、さらには種の別に注目するのではなく、例えば生き続けたいという願望があるといったような存在の個の選好の性質に基づいて考えるべきである」
- 4) 「我々は、自分の行為だけではなく、行なっていれば防げたであろうが実際に行なわなかったということに関しても責任があるということ」⁽²¹⁾

シンガーが、こうした独自の倫理原則を考案するにあたり、批判対象に据えているのが、西洋の伝統的な思考である。シンガーは、スピーシーズム（種差別：人類は動物よりも優れているという前提に基づく、人間による他の動物種に対する差別あるいは搾取）・性差別・人命至上主義

・環境破壊をもたらした共通の西洋に支配的な思考の起源に、『創世記』以降のユダヤ＝キリスト教的な発想とギリシア哲学の影響を見ている。さらに、世界の貧富の差を生み出したのはプロテスタントに遡る私益中心の考え方に由来するとも見なしている。なぜこうした由来にまで遡って考察しようとしているのかというと、「キリスト教の道徳的枠組みは、あまりにも長きにわたって根本的に評価しなおすことが禁じられてきたが、おそらく今日では、もはやこれを前提とすることなく、これらの問題について考察することが可能であろう⁽²²⁾」といったシンガーの発言にもあるように、自分たちの枠組みについて相対化して見つめることが可能になった時代に、無意識に伝統的な思想から影響を受けている自分たちの思考の特殊性に自覚的になるよう促す意図がシンガーの根底にあると考えられる。

以下においては、シンガーの倫理原則を適用させて考案された、実践問題への哲学的取り組みの具体例を見ていくこととする。

2-2 『動物の解放』とその波及効果

道徳哲学および政治哲学における平等と権利についての議論が、ほとんど常に人間の平等と人権という問題の枠組でなされてきたため、動物の平等は問題として意識されることはなかったとシンガーは指摘している⁽²³⁾。「苦しみを感じる能力こそが何らかの存在が平等な配慮を受ける権利を得るために備えていなければならない必須の性質である」と主張し、(利益に対する平等な配慮)は人間だけが対象ではなく、動物にも適用すべきであるとシンガーは主張する⁽²⁴⁾。西洋において伝統的に、スピーシーズムが横行してきたルーツを、ユダヤ教(『創世記』⁽²⁵⁾)と古代ギリシャ思想(アリストテレス)にまで遡って考察し、それらが融合したキリスト教(トマス・アクィナスの見解⁽²⁶⁾)が支配的だった時代、啓蒙主義の時代を経て現代に至るまで、「人間の生命だけが神聖である」といった種差別認識が西洋社会の意識の中に深く入りこんできたことを告発している。『動物の解放』では主に、読者がスピーシーシストの立場で居続けることを、自ら道徳的に擁護できないと認識して、スピーシーシストの立場から実践的に脱却するよう呼びかけている。

このシンガーの著作が火付け役にもなって、動物解放運動は、十年とたたないうちに大きな市民運動にまで成長し、動物を使った製品検査から工場畜産にいたるまで、また、動物を毛皮に用いたりサーカスに使用したりすることから捕鯨産業にいたるまで、動物の扱いにかかわるあらゆる分野の社会的論争に影響を与え、社会と人々のライフスタイルに変革をもたらしてきた⁽²⁷⁾。「この運動の強さの一部は、その強固な哲学的基礎にあった。動物解放運動は、その考え方や支持の多くを大学の哲学者たちに負っていたという点で、最近の政治運動のなかには他に例が見られない」⁽²⁸⁾とシンガーが述べているように、哲学者たちが運動の主体者として携わり、種差別に反対する根拠を厳密に述べて「動物解放運動」に哲学的な意味づけを与えてきたところに、この運動の成功があったという。

2-3 貧困問題について

人間の品位のいかなる理にかなった定義にも満たないほどに、栄養不良、文盲、疾病、不潔な環境、高い幼児死亡率、短い平均寿命によって特徴づけられた「絶対的貧困」⁽²⁹⁾が今日の人類の悲惨の主要な原因となっていることをシンガーは強調する。そして、貧しい諸国の人々が一人当

たり平均して一年に180キロの穀物を消費しているのに対して、北アメリカの人々の消費量は平均して900キロであるという現実を見ても、本質的な問題は生産ではなく分配にあることに注目する。もし先進国の人々が家畜に穀物や大豆、魚粉を食べさせることをやめ、節約された分の食べ物を必要とする人々に分配すれば、世界中の飢餓に終止符を打つことができる。先進国の富の一部を未開発国の貧しい人々に回すだけで、状況は変えられるとシンガーは主張する。貧しい人々に対比して、絶対的に豊かな人々とは、基本的な生活必需品を手に入れるのに必要とする以上の所得があるということである。つまり、食べ物、住居、衣類、必要不可欠な健康保険、教育の費用を支払ったうえで、なお贅沢品に金を使うことができる人々である。そうした人々が現在行なっている以上の援助をしないのなら、貧しい国の人間を絶対的貧困に苦しませ、その結果、栄養不良、疾病、死に至らしめていると結論せざるをえないとしている。「もし私が贅沢品に金をかけた結果誰かの死を招くことになれば、私にはその人の死に対する責任があると言うだろう」と述べて、我々の日常的な行為にも他者の生存の責任が課されていることを自覚するよう促す。また、「しゃれた洋服、高価な食事、最先端のステレオ・セット、休暇の海外旅行、余分な車、もっと広い家、子供を通わせる私立の学校…このなかのどれをとっても、功利主義者にとっては絶対的貧困の減少に匹敵するほどの重要性をもたないであろう」とし、生きていくのに必要な衣食住以外のことに費やすお金があるのならば、自身の身を飾ることに使うのではなく、生きていくにも事欠くような現に苦しんでいる存在の救助に当てるべきだと主張している³⁰⁾。

2-4 中絶について

これまでの中絶論争においては、賛成派も反対派も胎児の意識の発達についてこれまで十分に考慮してこなかったとして、シンガーは、これまでの中絶論争の不備を取り挙げて分析している。そして、従来の「人間の生命の神聖性」原理とは異なる、胎児の意識に着目した新たな提案として、〈理性、自己意識、感知、感覚能力などの点で同じレベルにあるならば、胎児の生命に人間以外の生命と同じだけの価値しか認めないようにしよう〉と打ち出す。その根拠は、理性、自己意識、感知、自律性、快苦など、道徳的に意味のある特性を公平に比較検討してみれば、仔牛や豚やそれらにはるかに劣るとされる鶏が、どの妊娠時期にある胎児よりも進んでいることがわかるし、また、妊娠三ヶ月未満の胎児と比較すれば、魚のほうが意識の徴候をより多く示す、といった観察的事実に基づくとする。そこから、どんな胎児も人格ではなく、胎児には人格と同じだけの生きる資格がないと結論づけることが可能となる。この場合、中絶をするということは、胎児に感覚能力が具わるようになるまでは、内在的価値〔手段的価値に対するそれ自体としての価値〕をまったく持たない存在の生存を終わらせることであると言え、中絶を正当化できるとする。ただし、胎児が自己意識ではないにしても「意識」を持つようになれば、中絶は軽々しく行なわれるべきではないとも主張している³¹⁾。

また、理性と自己意識を持つことになる未来の人格（潜在的な人格）を有する胎児の生命を奪うことは不当であるとする中絶反対論に対しては、「潜在的」という意味はどこまで遡れるかを考察して、結合以前の精子や卵子を有する個人が避妊を日常的に行なうことや生涯独身で通す選択をすることも、未来の人格を有する胎児の形成を妨げているのであり、将来の人口を減少させることに結びつくとして中絶反対派の非難の対象とならざるをえなくなるという論拠から、「潜

在的な人格」を理由に中絶反対を正当化することはできないと反論している⁽³²⁾。

2-5 障害のもつ胎児・新生児を殺すことについて

シンガーは、「新生児の生命は成人の生命と同様に不可侵である」というこれまで事実上誰も異議を唱えなかった伝統的な考えに抵触する提案を自ら行なったことの斬新さを自負している。「人間の胎児と新生児は生存権を持たないので、妊娠中絶と嬰兒殺しは道徳的に許容可能だ」とした生命倫理学者マイケル・トゥーリーによる主張⁽³³⁾に加えて、シンガーが自負する持論の斬新さとは、「理性、自己意識、感知、感覚能力などの点で、生後一週間目、一ヶ月目の赤ん坊よりもまさっている人間以外の動物がたくさんいるという事実から、胎児と同じく新生児にも人格と同等の生きる資格はない」と断言して、胎児や新生児といった人間を能力的に一部の動物よりも劣る存在として位置づけたことにある。シンガーは、「ほんとうに道徳的に重要な意味で生命がはじまるのはいつからか」といった問いこそが重要視されるべきで、「時間を通じて自分が存在するという意識を持つようになってはじめて道徳的に重要な意味で生命がはじまると言える」ことを主張している。現在において当たり前と見なされている、乳児の生命の保護を至上のものとする取扱いは普遍的な倫理的価値というよりも、むしろすぐれてユダヤキリスト教的な態度、つまり西洋文化的な態度であり、歴史の上から見て、乳児殺しは、地理的にはタヒチからグリーンランドにおよび、文化的にはオーストラリアのアボリジニから古代ギリシアや清朝中国の都市にいたるまで、さまざまな社会で行なわれてきたことが確認されることから、乳児殺しはおそらく最初の人口抑制政策だったのであるとして、世界全体として人口過剰な現在において、シンガーは乳児殺しを正当化している。ただし、「認められるべき乳児殺しについてはきわめて厳格の条件が示されるべきである」とし、乳児殺しが中絶と同様に扱われうるのは、最も近い親族がその子供が生きることを望んでいない場合に限られるとする。また、「乳児は、生存可能な時期に達していない胎児と異なり、誰か他の人に養子にもらってもらえることができるのだから、そのような例はまれにしか起こらないだろう」とは補足している⁽³⁴⁾。

なぜ、伝統的な価値観に抵触してまで乳児殺しを正当化させたいのかということ、新生児を代替可能なものとみなすことによって、出生前診断を受けたあとで中絶することよりもかなりの利点があるとシンガーは考えるからである。現在のところ、両親が障害を持った子供の生死について選択できるのは、たまたま妊娠中に障害が発見されたときに限られる。もしも、仮に障害新生児に、生後一週間なり一ヶ月なり、その子の生死について関係者が決定を下す猶予期間が認められるならば、出生前診断によるその子の誕生以前の把握よりもはるかに多くの知識にもとづいて生きさせるかどうかの決定を下す選択が可能になり、不必要な苦しみを減らすことができるといったシンガーの功利主義的観点が読み取れる。実際に、誕生した子供が正常であるか重度の障害を有するかで両親の反応が大きく異なるという事実や、正常な子供を養子に取りたいと思って順番を待っている夫婦が数多くいる。一方、重度の障害をもって生まれた子供がその両親から子育てを放棄されて施設に預けられて生きていることに目をむけて、あえてその子供を育てたいと申し出る夫婦はほとんどいない。そうした現実から考えても、重度の障害をかかえる子供は〈みじめな人生をおくる〉ことになり、その生は苦しみである、とシンガーは見なし、「乳児の生命が悲惨なものであるために生きるに値しないとき、そのような生命を生きる存在の内的観点に立って、

功利主義の立場からは、乳児を生かしておくための「外在的」理由—両親の感情など—が何一つないなら、死ぬ手助けをして乳児がそれ以上苦しむことがないようにするべきだ」とシンガーは主張する⁽³⁵⁾。苦しむ者の代弁者としての発言を装いながらのこの発言には、「障害」＝「苦しみ」という外的判定を自明視し、その生命の関係者の自発的意思決定がない限り、重度の障害児の生が絶たれる（非自発的安楽死）ことを正当化しようとする意図が伺える。

2-6 安楽死法制化について

シンガーは、死が殺される本人の利益になるという点で、「すでに人格ではなくなった」人の安楽死も擁護しようとする。かつては自らの生死について選択する能力をもつ人格であったが、今では事故や加齢によってこの能力を永久に失い、しかも、この能力を失う以前に、そのような状況におかれたとき、生き続けたいかどうかについて何ら見解を表明していなかったという人の場合も、現時点では自己意識や理性や自律的意思決定能力を欠いているので、人格を有する存在とは見なされない、とシンガーは考える。さらに、「回復することなく死ぬことが確実であるなら、昏睡状態で生存することには何の利点もないように思われる」として脳死者の生を否定する発言もしている。

さらに、人格を具えた存在の自発的安楽死の法制化も、苦しみの生を生きるよりも死を与える方が殺される本人の利益になるという点で、シンガーは推奨に努めている。安楽死が適当かどうかについて医師が判断を誤る危険性については、それによって数年に一人か二人死ぬかもしれないが、そうした安楽死の法制化によって生じる不必要な死と、安楽死が法制化されないことによってほんとうに末期にある患者がこうむるかもしれない多くの身体的苦痛や精神的苦痛とを比較考量すれば、安楽死を法制化する方をより大きな善と見なす考えをシンガーは表明している⁽³⁶⁾。

2-7 環境問題について

シンガーは原生自然の保存を正当化する。その理由は、原生自然は、我々が先祖から受け継いだものであり、過去とのつながりを存続させるためにも、我々の子孫にも残すべきで、未来の世代のためにも我々には保存する責任があると考えているからである。自然を保護することの価値について、シンガーは「過去とのつながり」といった連続性を重視している。「かつての伝統志向型の人間社会に比べて、近代的な我々の政治的、文化的精神にとっては、長期的価値を認めることはきわめて困難である」としながらも、森林を伐採することによって得られる利益—雇用や商業における利益、輸出による収入、安いボール紙や包装用の紙など—は短期的な利益であり、そうした利益のために森林が伐採されたり、ダム建設のために水没したりすれば、過去とのつながりは永久に絶たれてしまうことになり、それは、我々の後にくるすべての世代がこうむる犠牲であるとして、自然保護の重大さをシンガーは主張する⁽³⁷⁾。

シンガーが擁護する自然の価値とは、あくまで人間が過去とのつながりを認識できるからという理由によるのであり、自然自体に内在的価値があるとの見方を否定する。ただし、環境を傷つける行動をすべて倫理的に疑わしいものとみなし、不必要に環境に有害な行動をはっきり悪いとみなし、資源を節約しリサイクルをすることを徳とし、浪費と不必要な消費を悪徳とする、さらに儉約を促進することが環境倫理の役割であるとシンガーは提唱している。その取り組みに関し

てはまず個人が実践できることとして、肉食を主とする食事をとることを勧めている。肉食主義を採る根拠として、シンガーが注目する点は次のことである。世界の穀物や大豆の収穫高のおよそ38%が今や餌として動物に与えられている。この惑星には、人間の数の三倍の家畜がいる。世界のより貧しい部分で生まれる赤ん坊の数を我々は悲観的に見ているのに対し、我々自身も誘因となっている飼育工場での動物数の過剰の方は無視している。産業国におけるエネルギー集約型の工場飼育の方法は、化石燃料の莫大な量の消費を引き起こす。1960年以来、中央アフリカの森林の25%は、牛のために伐採され続け、最終的に、世界中の牛は大気中に放出されるメタンガスのおよそ20%を排出していると考えられ、メタンは太陽からの熱を二酸化炭素の25倍閉じこめている。地球環境の悪化を促進するこのような非功利をまず解消すべきとして、シンガーは個人に肉食主義の実践を促している⁽³⁸⁾。

2-8 応用倫理学におけるシンガーの特殊な位置

以上、シンガーの実践問題への提言を簡単に紹介したが、これらに対する批判や反論が数多くある中で、自身の倫理原則を明示し、すべての問題に当てはめて考察し、誤解を恐れずに自分の考えを分かりやすく説明して持論を展開するといったシンガーの姿勢を肯定的に評価する人もいる⁽³⁹⁾。生命倫理学者の浅井篤は、シンガーのような、可能なきはいつでも具体的な提言を提示し、けっして結論をうやむやにしないといった態度が、「哲学や倫理学そして生命倫理学領域の活動が社会にインパクトを与えるためにはなくてはならない点だと思われる」と述べ、「哲学者や生命倫理学者が象牙の塔から出て社会を変えるためには、彼の生き方や書き方から学ぶことが大いにある」と称賛している。

シンガーの理論は、動物や自然環境に関しては「環境倫理学」の分野、中絶や障害を具えた胎児・新生児、安楽死に関しては「生命倫理学」の分野において、それぞれ個別的に取り上げられてきた。これまでの応用倫理学の歩みの中で、生命倫理学と環境倫理学は対立関係にあるものとされてきたが、シンガーのように、このどちらの分野にも属する存在は珍しい。分野別に扱う限りでは、シンガーの倫理に潜む矛盾に気づくことは困難であるが、より包括的な視点から、シンガーの倫理に一貫性が見出せるかを探っていくことによって、ある難点に突き当たる。「苦しみ」を焦点に、動物にはより道徳的な配慮を行う正当性を呼びかける一方、人間という種に属していても、理性と自己意識を持たない存在は動物と同等の扱いでよいと主張することで、存在価値の新たな階層序列化を推進させてしまったのではないかといった疑問である。

2-9 存在の序列化

ここで、シンガーの倫理判断においての基本概念をおさらいしておく、「選好」が満たされるかどうかが重要視される。選好が満たされるならばそれはプラスの利益であり、満たされないならばそれはマイナスの利益になる。生命の扱いをめぐる倫理を考察するにあたり、シンガーは「快苦に関する利害」と「自分の将来に関する利害」といった二種類の利害に注目する。快苦に関する利害は、感覚をもつ存在ならばみな持つことになるが、感覚を持たない生命は快苦に関する利害すら持つことはない。自分の将来という観念は、時間の中で自己が存続するという意識によって初めて可能になり、これは理性と自己意識を持つ存在に特有の意識である。感覚はあっても理

性と自己意識を持たない存在は、単に快苦に関する利害だけを持つことになる。

シンガーの思考をまとめると、①感覚をも持たない生命（無感覚な生命）、②感覚だけを持つ生命（感覚的生命）、③理性と自己意識を持つ生命（人格person）といった三通りの生命に分類できることになる。無感覚な生命はそれ自体ではいかなる利益も持たない。したがって、感覚的生命や人格に与える影響を度外視すれば、無感覚な生命を殺しても何ら利益を損なうことにはならないし、逆に無感覚な生命を増やしたとしても利益を増やすことにはならない。感覚や理性と自己意識は、中枢神経系の発達によって生じてくる、と考えているシンガーにとっては、感覚的生命や人格に与える影響を考慮しなければ、無感覚な生命を殺したり増やしたりすることは、それ自体では倫理的に無記な行為、倫理とは無関係な行為であり、無機物を生産したり破壊したりする行為と同じであり、配慮すべき利害は、基本的には感覚的生命と人格にのみに属することになる⁽⁴⁰⁾。

こうした、感覚の有無による線引きを道徳的配慮の基準とするようなシンガーの立場は、西洋の歴史において動物保護の思想が広まる上で効力を発揮したベンサム以降のイギリス功利主義の流れを汲んでいる。この立場は、「(動物に対する配慮として)問題なのは、彼ら(動物)が理性的に思考できるかどうか、言葉を話すことができるかどうかではなく、苦しみを感じることができるかどうかである」と述べたベンサムの発言に由来し、無痛屠殺の道徳性を記述したショーペンハウアーの哲学と並んで、パトス(痛感)中心主義と呼ばれる⁽⁴¹⁾。

さらに、シンガーは、感覚的生命と人格とを比較して区別する。ここで言う「人格」という言葉は、「理性と反省能力を持ち、異なる時・所にいても、自分は自分であり同じ思考する存在だと見なしうるところの思考する知的存在」と定義したジョン・ロックにならって(理性的で自己意識のある存在)という意味で使用している⁽⁴²⁾。感覚的生命が経験し欲求するのは、ただ現在と近い将来にわたって苦痛を避け快を得ることだけである。感覚的生命にとって一生とは、刹那的な快と苦のみによって構成されている。このような快苦は、他の感覚的生命の快苦と質的に同じものであり、相互に埋め合わせることができる。例えば感覚的生命である動物を殺して失われる利害は、同種の動物を生むことで埋め合わせられる。したがって、感覚的生命である動物は、置き換え可能な存在である。だが、人格的生命は、一人ひとり異なる「自分の将来に関する利益」を持っており、この利益は他の人格のそれとは内容的に異なったものである。したがって、人格的生命が死ぬことによって失われる利害は、他の人格的生命を代わりに生み出したとしても埋め合わせることができない。つまり人格的生命は置き換え不可能な存在であると見なすことができるとし、(人格的生命は単に感覚を持った生命を越えた独自の価値をもっている)ということを正当化している⁽⁴³⁾。

シンガーの実践の倫理を俯瞰すると、シンガーが理論を組み立てる際の戦略には、「種差別による人間中心の利益重視」を拒否して「動物も含めた総体的な苦痛の軽減」を重んじるものの、さらにそれよりも「理性的能力のある存在の選好」を優先するといったシンガー独自の倫理的配慮に関する価値観の序列が組み込まれていることが指摘できる。「人格」を至上のものと価値づけたことからして、存在するものより一層の序列化を推進させてしまったという矛盾を指摘することができる。

3. 「生—権力」を加速化させるバイオエシックス

3-1 医学的・科学的現状を追認した倫理

シンガーが脳死者の意識の不可逆性を疑いのない前提として論じている姿勢や、出生前診断による中絶や、苦しめないようにして死なせる安楽死を容認する見解からしても、可能になった技術やそれを促進する医学的根拠を無条件に受け入れて、科学技術や医療に対して哲学的思考を駆使して、医学的・科学的現状を追認する倫理を編みだしたに過ぎないのではないかといった疑問が生じる。

シンガーには、社会システムの視点やフーコー的な「権力」批判の観点は乏しいといわざるを得ない。第二次世界大戦終了から1970年頃にかけて「社会の科学技術化」という現象が著しく進行した。それは、二つの世界大戦を通して、科学と技術が接近し始め、戦争に役立つのみならず、産業国家の競争力の強化にも有用であることが認識され始め、以降、科学技術への政府および企業からの投資の増大に伴い、大量の科学技術研究者が登場し、その研究の成果物が社会に流入することを通じて、社会の側は利便性を享受し豊かになっていくといった現象のことである。その現象が深く浸透し、社会が科学技術の産物と密接になるにつれて、社会の運営そのものが科学技術に依存するようになる。科学哲学者の小林傳司は、1970年代こそ科学と政治の交わる領域—アメリカの原子物理学者ワインバーグが名づけた「トランス・サイエンス」⁽⁴⁴⁾—的問題群が増え始めたことを指摘している⁽⁴⁵⁾。生命倫理で取り上げられる問題—脳死・臓器移植、クローン、安楽死・尊厳死、出生前診断等—はまさに「トランス・サイエンス」的問題群の中に含まれ、その是非が検討されるような事態は、皮肉にも延命技術が発達したゆえに発生している。そうして、1970年代以降に加速化したバイオエシックスの取り組みは、「科学技術の進歩によって生じた人間の生と死のあり方の変化に対応する領域」というラベリングのもと、医療の経済面、限界のある資源を考慮し、利益の最大化を目指してきた結果、人間の価値を高めるどころか、それとは逆方向に人間の身心全体の価値を低め、人間の価値を脳、即ち意識に限局させてしまう方向に進んでしまった。この流れを推進させ人々の承認を得てきたのが、まさに個人の「選好」を重んじる「自己決定」の論理による説得力であった。しかも、「選好の充足の最大化」を図る選好功利主義は、自由主義の潮流とも親和性が強く、欲望充足を正当化することにもつながりやすい。

こうした現象に荷担した責任には無自覚のまま、シンガーはあくまで、個人の理性による「選好」に判断を委ねて、利害関係者のすべての立場を考慮した反省的思考による意思決定を行うことの重要性を呼びかけてきた。さらに、フーコーが「生—権力」のメカニズムとして指摘した⁽⁴⁶⁾ような、さまざまな分野で「身体」へのあらゆる介入が行なわれているといった現状にたいして、シンガーも英米圏におけるバイオエシックスの主要な論者たちと同様、「反省的思考の活用」といった倫理学のスタンスを適用させて、もっと広い枠組みにおいて批判的レベルで考察するといった取り組みには関与してこなかった。むしろ、「最新の科学医療技術」や「医学的見解の信頼性」を標榜した医者や科学者たちのプロジェクトに哲学的なお墨付きを与えたに過ぎない、ともいえるだろう。そうした自体を揶揄して、哲学と現実の溝が深まりつつあった1960年代の終わりに、医学をめぐるさまざまな問題が哲学者に実践的解答を出すよう求め始めたことに端を発する「医学が倫理学の生命を救う」事態がもたらされた⁽⁴⁷⁾、といった時代解釈もなされている。シン

ガーをはじめ哲学者・倫理学者たちが率先して、バイオエシックスの場に自らの専門性を駆使して貢献しようと努めるあまり、科学技術や医療の行使に疑問を挟まないといった態度が内包している価値そのものを批判的思考の対象にできなかったことが指摘できる。

また、そもそも功利主義と「生一権力」のメカニズムは共犯関係にあると言ってよい。それは、ベンサムが考案した「一望監視施設⁽⁴⁸⁾」的な発想に由来する。以降、現在に至るまでの経緯は、功利主義が、「最大幸福」原理に基づいて、「生命に対して厳密な管理統制と全体的な調整とを及ぼそうと企てる権力」＝「生一権力」による統制を推進するような言説の排出を請け負ってきた歴史と読みかえることができるかもしれない。シンガーの場合も、「選好」を重視した生命の序列化を設けることで、「生一権力」の普及を正当化する言説を与えてきたのではないかと指摘できる。

3-2 バイオエシックスと救済の構造

長年かけてその地域的風土に養成され、根づいた伝統的宗教や思想文化に基づく人々の共通感情なるものは、かつての思想文化に無自覚な人々にとっても、心身に染みついた感覚として確認される場合がある。グローバル化が進んだ現代においても、伝統的宗教観に根づいた感覚・思考の差異があらためて露呈されたのが、実はバイオエシックスの領域でもあった。

生命倫理政策の国際的な比較研究を行っている、科学技術文明研究所所長の米本昌平は、「日本を除く欧米先進地域はキリスト教圏の出自であるがゆえに、既存のバイオエシックスの体系がキリスト教的諸価値と共鳴関係をもっている」と指摘している。これまでの西欧（キリスト教圏）のバイオエシックスが、事実（fact）と価値（value）という二項概念から議論をはじめてきたということに米本は注目し、そこでは、科学が扱う自然は無色無価値の存在であり（科学的事実の価値自由）、それに価値や意味を付与するのは哲学や宗教であるというのが自明の前提となっていたことを指摘している。米本は、このバイオエシックスで採用されていた構造が、神学者たちが世界に関する一切の解釈を聖書などの經典群から演繹し意味づけしてきたキリスト教の自然や事物に対する態度と同型である、と指摘している⁽⁴⁹⁾。

また、池澤優は、生命倫理が、現実の問題に向かい合い、何らかの回答を出す営みとして設定された以上、対象を評価するための基準、即ち特定の世界観に依拠し、それが他の世界観に優越すると前提することをもって、規範的であらざるを得ないとして、「宗教学にとって生命倫理は神学に近い」と述べている⁽⁵⁰⁾。こうした指摘にヒントを得て、「神学」と「生命倫理」の類似性を考察してみると、伝統的に神学者たちが、時代的な事実即して、聖典における記述と教義的に矛盾がないように、世界を解釈するのに努めてきたのと同様、現代の哲学者が、現状即して、人間の理性的思考と矛盾がないように、現実を追認するような解釈を編み出すのに専心しているという姿勢は、神学者が哲学・倫理学者に代わったという違いと、価値判断の根拠を神に依拠させるか、人間の理性なるものに依拠させるかといった違いだけで、「事実」にたいして「価値」を付与する思想の役割という構図は伝統的に変わっていないことがわかる。また、シンガーのように生命の価値を序列化するということは、救済されるべき者の序列化、すなわち、現世における救済の優先順位を明記することの意味をもっているようにも思われる。

バイオエシックスをを考察する視点においては、それが学問上だけの論議に留まらず、生命に

関わる現実的な救済を内包する問題であるからこそ、哲学者・倫理学者をはじめとしたこの分野に関わる思想の提供者にとって、自らの専門家としての発言が実践的な場面に影響を与えるということに関して、より自覚的に捉えていくことが望まれる。アメリカ発の標準的バイオエシックスの歩みに見られてきたように、発言者自身の持つ文化特殊的な共通感情に対して無自覚に、その主張がいかにも普遍的価値を有するかのごとく主張し、それをスタンダード化していく潮流に対してこそ、批判的思考を適用させて、より一層の議論を深めることができるかどうか、今後も生命倫理を考えていく者にとって、ますます大きな課題となっていくに違いない。

日本における生命倫理学は、アメリカ発の標準的バイオエシックスの論理展開を輸入して以来長らく、そこで語られる自己決定原理やパーソン論的な考え方、原則主義的思考等を、普遍妥当性をもつものとして（実際には少なからずの人々が違和感を感じながらも）、鵜呑みにしてきた。バイオエシックス誕生以降30年近くの年月を経て、90年代後半頃からようやく、世俗的な普遍性を呈して語られるバイオエシックスの志向性が実は英米圏独自の文化・哲学的思考を反映するものであることが指摘されるようになってきた。異文化圏に属する日本の学者が、こうした文化的な生命観が反映されたバイオエシックスの背景となる土壌を見抜くことができなかつたのは、おそらく現代に至るまでの西洋文化圏における、科学と宗教・哲学の位置づけとその相互関係が把握できていなかったことにも起因するのではないかと考えられる。伝統的な宗教と哲学の位置、さらには科学との関係性を踏まえて、「救済の構造」という視点から、現代におけるバイオエシックスの思想を比較検討していくことが、宗教学にとっての今後の課題であるようにも思われる。

註

- (1) 生命倫理を「成長産業」と揶揄したのは、J.M.グスタフソン (Moral Discourse About Medicine: A Variety of Forms, *The Journal of Medicine and Philosophy*, 15, 1990., pp.125-142.)。また、そうした過剰な生命倫理拡大の状況を批判的に述べたのが、クラウザーとガートによる「原則主義の批判」という論文の中の次の一節。「過去二〇年間で生命医学倫理の分野は前例を見ない拡大を示してきた。万人の予想をはるかにこえて、多数の人々がかかわり、重要な分野として認められ、大学に無数の講座が作られ、いたる所でワークショップや講演会が開催され、おびただしい数の論文、著作、雑誌が登場した。こうした倫理教育への途方もない需要に応えるために、無数の著作、ワークショップ、講座が現れ、倫理学のさまざまな理論と方法をワン・セットにし、より多くの人に短時間で簡単にマスターさせようとしている」(K.D.Klouser and B.Gert, A Critique of Principlism, *The Journal of Medicine and Philosophy*, 15, 1990., pp.121-124.)。以上、香川知晶『生命倫理の成立』, i,ii頁からの引用。
- (2) Dale Jamieson (ed.), *Singer and his critics*, Blackwell Publishers, 1999, p.1. 及び、ヘルガ・クーゼ「序　ピーター・シンガーの実践倫理」、ピーター・シンガー『人名の脱神聖化』浅井篤／村上弥生／山内友三郎監訳、晃洋書房、2007年所収。
- (3) ピーター・シンガー『私たちはどう生きるべきか』山内友三郎監訳、法律文化社、1995年、序9頁。
- (4) ここで言う「選好する」という意味は、私たちが選択できるとき、習慣的にかつ意図的に他方より

一方を選ぶことである。

- (5) ピーター・シンガー『現実的な左翼に進化する』18頁。
- (6) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』x,153頁。及び, Hyun Hochsmann, *On Peter Singer*, Wadsworth/Thomson Learning, 2002, p.53~61.
- (7) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』272頁。
- (8) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』112頁。
- (9) 本項における「功利主義」の説明は、『岩波 哲学思想事典』1998年, 505頁。「行為」に関しては同書481頁。功利主義の学説とは, ベンサムによって18世紀末に提唱され, その後19世紀のミルやシジウィックなどによって洗練された学説を源とし, 現代でも英米を中心として根強い支持者を持つ倫理学説をさす。
- (10) ミシェル・フーコー『監獄の誕生』田村俣訳, 新潮社, 1977年
- (11) 宇都宮芳明・熊野純彦編『倫理学を学ぶ人のために』世界思想社, 1994年, 156,157頁。
- (12) Debra Galant, 'Peter Singer Settles In, and Princeton Looks Deeper', *New York Times* (March 5, 2000), p.9におけるギルバート・ハーマンによる発言。
- (13) Dale Jamieson, 'Singer and the Practical Ethics Movement', *Singer and his critics*, Blackwell Publishers, 1999, p.6,7.
- (14) ヘルガ・クーゼ「序 ピーター・シンガーの実践倫理」, ピーター・シンガー『人名の脱神聖化』ii, iii頁。
- (15) Peter Singer, *Writings on an ethical life*, p.xiv,4. この評論は, Peter Singer, *Writings on an ethical life*, HarperCollins Publishers, 2000に収録されている。
- (16) ピーター・シンガー『人名の脱神聖化』2007年, 2~17頁所収。
- (17) Dale Jamieson, 'Singer and the Practical Ethics Movement', Dale Jamieson (ed.), *Singer and his critics*, p.5.
- (18) ピーター・シンガー『人名の脱神聖化』13~17頁。
- (19) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』450頁, 山内友三郎による「訳者あとがき」。
- (20) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』448頁, 山内友三郎による「訳者あとがき」。
- (21) Peter Singer, *Writings on an ethical life*, HarperCollins Publishers, 2000, p.xv~ xviii.
- (22) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』p.208頁。
- (23) ピーター・シンガー『動物の解放』300頁。
- (24) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』70頁。
- (25) シンガーが自著の各所でとり挙げる聖書の引用は『創世記』1:24-8の以下の箇所である。「神、言い給いけるは、我らにかたどりて、我らの形のごとくに、我ら人をつくり、これに海の魚と天空の鳥と、家畜と全地と地にはうところの諸々のほうものを治めしめん、と。」「神、その形のごとくに人をつくり給えり。すなわち、神の形のごとくにこれをつくり、これを男と女につくり給えり。」「神、彼らを祝し、神、彼らに言い給いけるは、生めよ、殖えよ、地にみちよ、これを従わせよ、また海の魚と天空の鳥と地に動くところの諸々の生物を治めよ」
- (26) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』317頁。キリスト教神学をアリストテレスの思想と融合させたトマス・アクィナスが、代表作の『神学大全』の中で、アリストテレスの次の一節を書い

ている。「植物は動物のために存在し、知性のない獣は人間のために存在する。家畜は人間の使用と食料のために存在し、野生動物は、食料や、たとえば衣服やいろいろな道具のような生活の付属品となるために存在する。自然は目的のないものや無駄なものを作らないのだから、自然が人間のためにすべての動物を作ったことは明白な事実である」。アキナスは、このアリストテレスの見解は『創世記』に述べられている神の命令に一致するとも記している。

- (27) 『実践の倫理〔新版〕』83頁、ピーター・シンガー／パオラ・カヴァリエリ編『大型類人猿の権利宣言』山内友三郎／西田利貞監訳、昭和堂、2001年、301,302頁、ピーター・シンガー『生と死の倫理』極則章訳、昭和堂、1998年、218頁。
- (28) ピーター・シンガー『生と死の倫理』218頁。
- (29) 「絶対的貧困」の定義について、シンガーは、世界銀行の*World Development Report 1978*, p.iii から、世界銀行総裁であったロバート・マクナマラの言葉を引用して述べている。
- (30) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』262~267頁。
- (31) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』172,173,183頁。
- (32) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』186~187頁。
- (33) Michael Tooley, 'Abortion and Infanticide', *Philosophy and Public Affairs*, vol.2, 1972. 邦訳「嬰兒は人格を持つか」『バイオエシックスの基礎』94~109頁。生命倫理学の古典的文献の1つ。
- (34) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』204~209頁。
- (35) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』215~228頁。
- (36) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』229,230, 236,239頁。
- (37) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』321~326頁。
- (38) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』339~342頁。
- (39) Dale Jamieson, 'Singer and the Practical Ethics Movement', *Singer and his critics*, Blackwell Publishers, 1999, p.6,7.及び、シンガー『人名の脱神聖化』226~227頁、浅井篤による後書き。
- (40) 土屋貴志「生命の「置き換え可能性」について—P. シンガーの諸論を中心に—」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要, 47-1: 64~66頁。
- (41) 土屋貴志「生命の「置き換え可能性」について」64~66頁。
- (42) ピーター・シンガー『実践の倫理〔新版〕』105,106頁。
- (43) 土屋貴志「生命の「置き換え可能性」について」81,82頁。
- (44) 小林傳司「科学技術とガバナンス」『思想』No.973,11頁。ワインバーグは1972年にこの概念を提出した。それまでの科学技術と社会の関係についての伝統的理解は、次のようなものであった。真の知的関心と好奇心のみによって遂行される科学は、その社会的、政治的利用と切り離されるべきであり、科学者は自らが生み出した客観的で中立的な知識だけを、社会や政治に差し出すという発想である。権力に対して真理を述べるというのが科学者の役割ということになる。この場合、純粋な科学の領域と純粋な政治の領域が明確に区別できることが前提となっている。ワインバーグが指摘したのは、この区別が現実には維持しがたく、両者の交わる領域が大きくなってきていることであった。
- (45) 小林傳司「科学技術とガバナンス」, 5~26頁。
- (46) ミシェル・フーコー『知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年、169~203頁。フーコーは、生に

対する権力の組織化の発展を、管理における二つの極に起因させた。一つは、「機械としての身体」という視点からの「身体に関わる規律」。もう一方は「生物学的プロセスの支えとなる身体」という視点からの「人口の調整」である。その二極から、身体の隷属化と住民の管理を手に入れるための多様かつ無数の技術の爆発的出現をもたらしたことを明かし、生きているものを価値と有用性の領域に配分することが問題となるような、人々を規格化させる〈生—権力〉が資本主義の発達に不可欠であったことを指摘した。

- (47) 香川知晶『生命倫理の成立』勁草書房、2000年、p.182。「医学が倫理学の生命を救う」事態を指摘したのは、S.トゥールミン (How Medicine Saved the Life of Ethics, *Perspectives in Biology and Medicine*, 25, 1982, pp.736-750.)
- (48) ミシェル・フーコー『監獄の誕生』204頁。ベンサムが立てた原理は被拘留者にとって凝視されているという意味で可視的でなければならなかった。この装置は、権力を自動的なものにし、権力を没個人化するがゆえに重要な装置であった、とフーコーは指摘した。
- (49) 米本昌平『バイオポリティックス』中央公論新社、2006年、5頁、28~32頁。
- (50) 池澤優「宗教学的生命倫理研究のための素描(上)」、『東京大学宗教学年報XXIV』東京大学宗教学研究室、2007年、13頁。

A Philosopher's Participation into Bioethics: A Study of Peter Singer as a Practical Missionary of Ethics

Emiko YAMAMOTO

It is commonly held that philosophers have contributed little to bioethics which had already developed to a great degree in the United States by the early 1990s.

Peter Singer is one of the leaders of the practical ethics movement, and one of the most famous and influential philosophers alive. He has considered not only philosophy and ethics, which are his areas of specialisation, but also politics, economy, medical care, environment, international aid and sociobiology from his own philosophical framework following a strand of utilitarianism, and devoted himself to produce his own practical and philosophical solution about today's various problems. He also served as the first president of the Institute of International Bioethics, the chair of the Great Ape Project and an animal rights organization. Before holding many important posts, he had already inspired philosophers to participate in Bioethics in the early 1970s.

The primary purpose of this article is to consider the relationship between Singer and Bioethics from the perspective of religious studies.